

セカンドステージ

定年後は田舎で暮らしたい。でも都会にも住み続けたい。そんなシニアの夢を実現させる移住方法が注目されている。デュアルライフ(二地域居住)。都市近郊にセカンドハウスを持つ都会人が増えるとともに、地方自治体も交流人口増大を狙って動き出した。

最長5年利用可能

東京都心から北東に約百キロの茨城県笠間市。笠間稲荷神社や笠間焼などで知られる観光都市だ。その西部田園地帯に同市が二〇〇一年に開設した笠間クラインガルテン(宿泊施設付き市民農園、面積約四〇〇アール)。都市住民に人気が高いのはラウベ(宿泊小屋)が備わった約三百平方メートルの貸農園五十五区画。誰でも年間料金四十万円で最長五年間利用できる。

ガルテナー(クラインガルテンの利用者)などで構成する「笠間を楽しむ会」会長の亀山吉男さん(72)は、〇四年からの利用で笠間市では有名人。六十七歳で会社を辞め「野菜作りに挑戦したい」と思っていた。芸術好きの妻が美術館などが多い同市に頻繁に来ていた縁で応募した。

自宅のある東京・板橋から夫婦で車で一時間半かけて毎週金曜日夜に来て日曜日夜に帰る。スイカやメロン、タマネギなど約三十種類の無農薬有機の果物、野菜を作る週末。「農作物を作る楽しさは言葉で表せない。ここには四季折々の美しさがある。心配していた血糖値も下がった」

地域交流にも熱心だ。国際標準化機構(ISO)認証に詳しい経験を生かして地元で講演会を開いたり、そば打ちなどの交流会を企画したりしてきた。市も耕

放棄地の有効利用が狙い

だったが、外部から都市住民が流入、地域が元気になる(青木繁産産業経済部長)と満足顔だ。

クラインガルテンは全国に約七千カ所。笠間市では五年間の契約期間が終わった後、同市が気に入った二世帯が付近に土地や住宅を購入した。

東京・品川に住む戸松重

夫さん(68)は六十二歳で

会社役員を辞めた。最初はゴルフさんまいで悠々自適の生活をしてきたが、次第に充実感を失った。そんな時に目にしたのが笠間クラインガルテンを紹介する新聞記事。すぐに飛びついてガルテナー一期生に。

交通アクセス良く

初めて体験した農作業は楽しく、あっという間に五年が経過。友人も増え、地主から約八百二十五平方メートルの土地を借りてセカンドハウスを建設。「好きな時に来て帰れる。小さな種から大きな野菜ができる収穫の楽しみは格別」

2地域居住しませんか 田舎にセカンドハウス



農業など趣味楽しむ 人々の交流も活発に

笠間クラインガルテンで週末農作業に励む亀山さん。後方はラウベ(茨城県笠間市)

デュアルライフを成功させる7つのコツ

- 受け入れ難い自治体を探せ
都市住民を迎える自治体は受け入れ組織や受け入れプログラムを用意している
- 気に入った地域を見つけても即決せず
これはという地域を見つけても、何度も訪問したり、短期滞在で慎重に判断を
- 配偶者への説得は気長に
都会暮らしに慣れ、田舎暮らしに反対する配偶者がしばしばいる。まず本人が単身で実践し、配偶者に良さを理解してもらう
- 田舎で何をするか事前にしっかり計画
漫然と過ごす、目的を見失って失敗も。農作業など、事前に暮らし方を決める
- 月に何度田舎暮らしをするか事前に目標
時間のある時に行こうとしても意外と行けない
- 車は必需品と覚悟を
公共交通手段は少なく、自宅からの往復や買い物などに車は不可欠
- 地域住民との交流は積極的に
地域交流は生活を豊かにするために欠かせない。友人ができて助けられることも多い
(注)専門家、体験者の意見をもとに作成



デュアルライフに役立つ主なポータルサイト

- 移住・交流推進機構(JOIN)
iju-join.jp/
- まちむら交流きこう(都市農山漁村交流活性化機構)
kouryu.or.jp/
- NPOふるさと回帰支援センター
furusatokaiki.net/
- 暮らしの複線化応援サイト
kantei.go.jp/jp/saityarenzi/fukusenka/index.html

一方、清流日高川や安珍清姫伝説の舞台、道成寺などで知られる和歌山県日高川町。こちらも大阪から車で約一時間半の近さが人気で、二地域居住をする都会人が増えている。大阪府富田林市に住む稲田亨二さん(63)は六十歳で定年退職後、日高川町の受け入れ組織「ゆめ倶楽部21」を知って登録した。運良く空き家が見つかり、稲田さんは昨年五月からは大半が田舎暮らしに。趣味の多い妻は都会暮らしと田舎暮らしが半々という新生活が始まった。

稲田さんは「ターニングポイントで大阪から移住した瀧川泰彦さん(70)主宰の「お米塾」に参加した。「田舎暮らしがこんなに楽しいものだとは思わなかった。初めてスキ、クワを使った時、思わず快さを叫んだほど」。日高川町は「温暖で交通アクセスは良く、自然は豊

か。大阪からの交流人口が増えれば経済効果も上がり、地域住民も刺激を受ける」(山下泰三農業委員会事務局次長)と歓迎する。デュアルライフに詳しい企業研修講師の渡辺パコさん(47)は「デュアルライフは田舎暮らしの新タイプとして重要」と考え、東京・世田谷の賃貸マンションに住む一方、山梨県北杜市の山間地に約千二百五十平方メートルの土地を購入して住宅を建てた。

大学の非常勤講師なども務め東京暮らしはやめられないが、月二回平均十日間の田舎暮らしは欠かせない。「パソコンさえあればどこでも仕事ができる。森作り、畑作りに野鳥の餌付けと生活リズムができて、心身ともに健康そのもの」と訴える。
(編集委員 木戸純生)